

特集

緩和ケア病棟開設のお知らせ ②

緩和ケア内科部長 村上 真基

前回のみどりが丘だよりでお知らせしましたように、当院では2020年の夏に緩和ケア病棟を開設いたします。今回は、緩和ケア病棟がどのような役割を担うのかをお伝えします。

緩和ケア病棟は、わが国においてホスピスと呼ばれている病院・病棟とほぼ同じです。欧米のホスピスは「終末期を過ごす場所」であるのに対して、緩和ケア病棟は、がん患者さんの①痛み、息苦しさ、吐き気などの苦痛を和らげる、②終末期の最期の時間を過ごす、③抗がん治療終了後の退院までの準備、④在宅療養が難しくなったときの受け入れ、⑤在宅療養が長くなり介護する家族が疲れてしまったときの一時入院、といった、さまざまな役割を持っています。ときどき、患者さん・ご家族から「ホスピスや緩和ケア病棟では何も治療せず、ただ寝ているだけなのですか」と質問されますが、それは違います。痛みや苦しさを減らすための治療、ご家族と一緒に穏やかに過ごせるケアなど、専門的な医療を日々おこなうための設備とスタッフを備え、ホスピスの語源である「おもてなし」を提供します。

このような役割の緩和ケア病棟は、長野県東信地区では初めてのものとなります。私たちは、地元住民の皆さまへ、高いレベルの緩和ケアを提供できますよう、準備を進めています。

緩和ケア病棟のための クラウドファンディング(寄附募集)のご案内

緩和ケア病棟を開設するにあたり、国立病院機構の特性から、新たな医療器具・ベッド・備品などの購入や、看護師の研修にかかる費用は自己資金で賄わなければなりません。日々の診療を維持しながら、満足できる緩和ケア病棟を作るためには資金が足りず、このたびクラウドファンディングという形で寄附金募集をさせていただくこととしました。住民の皆さまのお力をお借りして、一緒に緩和ケア病棟を作りたいと思います。

ご案内のチラシをお読みいただき、インターネットの情報もご覧ください。また、クラウドファンディングの趣旨にご賛同いただき、ご協力いただけそうな方へお声がけくださりますと幸いです。

薬剤師の一口メモ

薬の置き場所・誤飲に注意しましょう

薬剤部 楠 浩子

- ・みなさんは、薬をどこに置いていますか？
- ・子どもの手の届くところに、薬を置いていませんか？

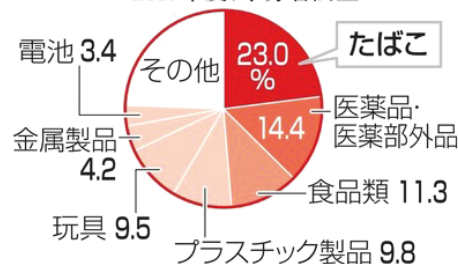
子どもの手の届くところに薬やものがあると、間違えて飲んでしまう、誤飲事故につながってしまいます。右のグラフは誤飲事故の発生頻度が高いものです。特に、注意しましょう。



- ・子どもは大人のまねをしたがります。薬をのむのをまねして口に入れることもあります。
- ・カラフルな洗濯用パック型液体洗剤も、子どもは興味を持ちます。洗剤などの置き場にも注意しましょう。
- ・おむつかぶれに塗った時などは、すぐにおむつをはめようとして軟膏を置いたままにしている、お母さんがおむつに気を取られている間にチューブを持って舐めてしまうことがあります。軟膏などは、使ったらまず手の届かない所に置いてください。子どもは新しい発想をする名人です。この機会に、子どもがいる家庭、子どもが遊びに来る家庭は、こんなところは手を出さないだろうと思わず、子どもの手で開けられない場所、高い場所など、薬の置き場所を見直してみてください。

子どもの誤飲事故

※2017年度、厚労省調査



☆下記表を参考に、お子さまの年齢や発達段階に応じた管理を心掛けましょう。

月齢・年齢	行動の特徴	事故の特徴
6か月から1歳半頃まで	身近にあるものを手に取り何でも口に運ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・口に入れることが想定されていない医薬品(塗り薬など)でも誤飲する ・通常の取り出し方でない方法で誤飲 (包装ごと口に入れる、袋をかんで破る、など)
1歳半頃から2歳まで	周囲への興味・関心が高まり人の模倣をする	<ul style="list-style-type: none"> ・足場を使って高い場所にある医薬品を取り出し誤飲 ・包装容器を通常の取り出し方で開けて誤飲
2歳頃から	興味を持って好んで手に取る	<ul style="list-style-type: none"> ・お菓子と間違えて誤飲 (ドロップ、ゼリー等の医薬品) ・子どもが飲みやすいよう甘く味付けされたシロップ剤等を多量に誤飲 ・足場になるものを自ら持ってくるなどして高い場所にある医薬品を取り出し誤飲

～参考～

- ・政府広報オンライン／お役立ち情報「ボタン電池や医薬品、タバコなど 子供の誤飲事故にご注意を！」
URL : <http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201509/2.html>



栄養管理室だより



world diabetes day
14 November

～みどり会のあゆみ～

栄養士 清水 博之

信州上田医療センターには「みどり会」という糖尿病患者さんと病院スタッフの友の会があります。今回はこれまでの「みどり会」の活動についてご紹介したいと思います。

●みどり会の歴史と活動●

友の会「みどり会」は平成18年9月に発足しました。会員には（公社）日本糖尿病協会が編集・発行する月刊誌「さかえ」や糖尿病関連の各種イベントのご案内をお届けしています。また糖尿病について一緒に学習する機会として『みどり会』を年に1～2回開催し、医師の講演や運動療法の実演、食事会など糖尿病治療にかかわるスタッフ総出で楽しいイベントになるよう企画してきました。そのほか11月には世界糖尿病デーに合わせて正面玄関前をテーマカラーであるブルーにライトアップしてきました。その『みどり会』もすでに22回開催され、次回の11月では23回目を迎えようとしています。そして残念ながら『みどり会』は次回11月の開催をもってひとまずお休みさせていただくこととなりました。長い歴史の中で、たくさんの皆さまにご参加いただきスタッフ一同、感謝の気持ちで一杯です。最後の『みどり会』ですが、たくさんの皆さまのご参加をお待ちしています。

田中内科医師の講演



ブルーライトアップ



*** 第23回糖尿病患者会(みどり会)のお知らせは次頁です!!**